

うさぎぐみ音楽会を終えて

青 木 裕 子

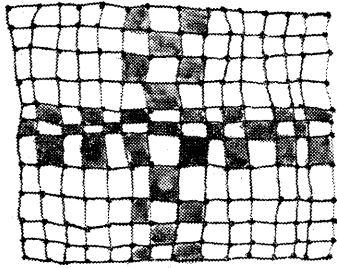
だれしも自分の精神史をふり返ってみると、音楽なり
絵画なりがその折に占めてきた意味があり、思い出があ
って、時にはある作品が果たした役割の大きさに驚くこ
とがある。うさぎぐみの子ども達に、そんな精神史をつ
くりあげる機会を与えてあげたいという漠然とした願
いをもっていた。

ところが、その願いが思いもかけず実現された。

——目をまーるくしてじっと見入っている子、一人立
ちあがり胸の前で手を握りしめ、うっとりしている子、
隣の友達と顔を見合わせニコリしている子……。

今、楽器紹介が終り、『動物の謝肉祭』が演奏されて
いる。まだ、音楽会が始まって三〇分しか経過してい
ない。しかし「音楽会は成功した！」と、心の中でつぶや
いてしまった。この判断は早すぎるかもしれないと思
いつつ、「成功」という言葉しか思い浮かばない。むしろそ
の判断に自信をもっていた程だった。そしてその通り、
うさぎぐみ音楽会は大成功だった。

これまでクラシック音楽の名曲鑑賞は、幼児の保育場



面では必要性を感じていなかった。なぜなら、音楽だけが宙に浮いてしまい、音楽作品自体も他と切り離されてしまうからである。幼児の保育場面では、子どもの生活と音楽作品がつながっていなければならないと考えている。

うさぎぐみ音楽会は、その点を頭におきつつ、子ども達にとって音楽をより親しみのもてるものにしようとの願いをもって、一年前から準備が始められた。この音楽会のきっかけは、うさぎぐみ在園児の父親が東京都交響楽団のクラリネット奏者である事。その父親を含め、都響のメンバーが二人編成のミニ・オーケストラ（東京都交響楽団トップメンバーアンサンブル）を作り、ここ数年来、各地の幼稚園で演奏会を行なっていることを聞き、父母の側から「ぜひ、うさぎぐみでも演奏会を」との声が高まったのである。私達職員は、その声にあおられ気味になった程であった。当初は、幼児が一時間も集中して聴いていられるかどうか、演奏会の雰囲気を出すにはどうしたら良いのか、グランドピアノが2台もいる

のか、ピアノ運搬費がそんなに高いのか、費用が足りないかもしれない……。初めての試みでもあり、不安な材料ばかり目につき、手探りの状態からのスタートであった。しかし、うさぎぐみのお母さん達には子ども達にナマの本物の音楽を聴かせたい、そして自分も一緒に味わいたいとの熱意があった。これまで年三回だった廃品回収を毎月一回ずつ行ない、収益をあげ、又各家庭で音楽会のための積み立ても始めた。うさぎぐみは園児の家庭そしてその置かれている地域は、階層としては決して豊かとは言えない。そんな苦しい家計の中から積み立て金を捻出するのは大変だったようだ。「一人五千円も積み立てするなんて高すぎる」「クラシックなんて、固苦しくてイヤだわ。」等、反対意見も出ていた。新しい事を始める場合、最初から足並みがそろわないのは当然ありうることだ。

しかし、準備打合せの中で他の幼稚園での演奏会の状況を聞き、見学にも行き、又都響トップメンバーアンサンブル代表の相葉武久氏の熱意にあふれた説明を受け

た。それにより、うさぎぐみでも演奏会を開くことが可能だと考えられるようになってきた。

それは、第一に子どものための演奏会は一般的に小学生以上が対象であり、幼児がナマの演奏を聴く機会は皆無である。だがこの演奏会は幼児を対象とし、しかも大会場へわざわざ出かけていくのではなく、子ども達が毎日遊び生活している場で、その音色と迫力をからだ全体で感じとれること。又、手を延ばせば届くような近い所で演奏することにより、大会場では感じとれない空気のやりとりがあること。

第二に、通常の演奏会では、聴衆はどんな小さな雑音にも注意しなければならないが、幼児のための演奏会では、少々体を動かそうが、「わあースゴイ！」など演奏にかかわる声を出しても構わない、と事前に伝えられた。

それは演奏者が幼児の特性をつかみ、暖い目で子ども達を見つめているからであろう。そういう演奏者の親しみやすさと、在園児の父親がメンバーに存在していることは、音楽や楽器に対し、さらに親しみが湧くこと。

第三に、日常の保育の中で歌っている歌をオーケストラと一緒に歌うことにより、子ども達ひとりひとりひとりが本物の音楽と対等に参加できること。これらの点は、都響のメンバー代表と私達職員との打合せの中で確信を深めることができた。

それらを踏まえて、父母に対しては毎月の父母の会の中で、幼児のための演奏会の意味を説明した。前述の廃品回収、そしてバザーにおける演奏会資金作りのための手芸品製作と手作りケーキの販売。このような準備を進めるうちに、演奏会を盛りあげようと、父母側の気持ちもまとまってきた。

しかし資金作りには苦労が多かった。うさぎぐみは少人数制を目的としている幼児グループ（無許可）なので、その年度の在籍は総勢四四名であった。当然各家庭の積み立て金だけでは、演奏会の諸費用すべてを賄えなかった。そこで父母側からも名案が続出。限られた予算なので、楽器移動の費用が捻出できない。そこで、演奏会場（成人クラブ室）へのピアノの搬入・搬出を力自慢の

父親達が、夜、それぞれの仕事を終えてから集り、六・七人であっといふ間に一階から二階の会場へセットした。ランドピアノは予算の都合上、どうしても借りることができず、二台ともアップライトピアノではあったが、これは演奏者が心良く了承して下さった。照明用のスポットライトは、町のアマチュア劇団から借り、反響板が無いので、代用の木製つい立ては、隣の保育園から、又暗幕は市社会福祉協議会から借用するというように、地域の資源を最大限活用した。会場作りは、演奏会用に座席のヒナ壇作り、照明・録音設備のセット、装飾等、すべて職員の手作りで仕上げた。

演奏会は音楽を演奏する人達だけでは出来あがらない。聴衆がそこにいて初めて成立するものであり、そして部外者は一人もいないと言われている。まさにうさぎぐみ音楽会は、この通りであった。聴衆であるうさぎぐみの子ども達、父母、職員と演奏者がピッタリ一致し、聴衆同士も心をつなぎあえることができた。これこそ音楽鑑賞の本来の意味でもあろう。

準備段階で最も不安な材料であった点、即ち子ども達
が飽きずに聴いていられるかどうか、最後まで心配であ
ったが、ナマの本物の音楽の前でそれはまったく杞憂に
終わった。又、子ども達を緊張させる必要もまったくな
く、保育者が子ども達に対して、音楽会への期待感をふ
くらませるだけで充分だった。『楽器紹介』『動物の謝肉
祭』『おもちゃのシンフォニー』そして最後に童謡四曲
をオーケストラの伴奏で歌うというプログラムが進むに
従って、子ども達が音の世界の楽しさに吸い込まれてい
くのが手に取るようにつかめた事が大きな喜びであっ
た。

父母や職員にとっても、ナマの本物の音楽に接するこ
とにより、心にゆとりをもつ素晴らしいひと時となった。
又、音楽に対して新たな目を向けるきっかけともなった
のである。

こうして、ひとりひとりの心の中に音色と感動を、そ
してさまざまな余韻を残し、第一回のうさぎぐみ音楽会
は終了した。昭和六〇年三月の出来事であった。来年も

ぜひ音楽会をみんなの力で作りあげたいというおまけが
つく程の大きな手ごたえがあった。

さて翌年度に入り、さっそく四月の父母の会で、第二
回目の音楽会を催すかどうか相談された。第一回目の印
象が色濃く残っていた継続児の母親達から、「ぜひ今年
も」という声や、「うわさを聞いて卒園児も参加したい
と言っている。」という盛り上がりが見られた。昨年は費
用の捻出に苦労したので、卒園児に参加してもらうこと
により、少しは資金的に楽になるのではないかという提
案が出された。そこで第二回の音楽会は、うさぎぐみ
園児と父母、そして卒園児とその父母が参加し、聴衆は
親子で一六〇名余りとなった。昨年と同じ会場なので、
肩と肩がふれあう程ぎっしり詰めこまれたという悪条件
ではあったが、三才児から中学生まで、それぞれの年令
に応じた反応が見られた。

もちろんプログラムは、昨年同様幼児を対象とした。
まず『楽器紹介』クラシック曲はナレーション入りで
『ピーターとおおかみ』そして次に運動会のリズムで使

った曲がオーケストラから流れ出すと、子ども達は自然に体を動かし始めた。最後に日常の保育の中で歌っている童謡三曲をオーケストラの伴奏で歌い、終了した。(昭和六一年三月)

子ども達が心から満足して音楽を聴くのか、何の感動もなく聴いているのか、どちらの聴き方であるかによって音楽の意味合はずいぶん違ってくる。

幼児期は、何の頼りもなく聴覚だけで音楽を把えるには幼なすぎる。音楽に共感し理解するには、何かのきっかけが必要であろう。絵画や芝居の鑑賞と同様に、音楽においても観たり聴いたりする経験と、それに関してどのような事柄を知っているかという幼児なりの知識との相互関係により、その子なりの音楽を聴こうとするようになる。具体的な生活経験を通して、音楽への理解が始まるうとした幼児期に、うさぎぐみ音楽会で子ども達は、それが楽しい想い出と関連することにより、自然に音楽のかおりを楽しむようになると思われる。

ゆっくりとした自然の成長テンポがくずされようとし

ている今、たった一時間の音楽会ではあったが、忙しい世の中を吹きぬける一すじのすがすがしい風を感じた。うさぎぐみの子ども達が成長し、いつの日か又、ナマの本物の音楽を聴く機会があれば、幼い頃の経験が何かの役に立って、その時にたじろぐことなく演奏を聴くことができようであろう。そして、彼らが好みに合った音楽を自ら見つけ出し、生活の中で「音楽すること」のできる能力をもつようになると信じている。

(横須賀基督教社会館

幼児グループ・うさぎぐみ担当)